旅と音樂

―主として創作の角度から―

信時潔

旅は人をして詩人たらしめ哲人たらしむといはれるが、旅と音樂も親しき關係をもつことは疑ひない。殊に創作を仕事とする樂人にとつては平素の限られた生活環境に好ましい刺戟を失つた時、旅することによつて心は開放され、童子のごとき耳目と觀者の心を以て新鮮な自然と人生の姿に接し、その詩思樂想を豊にされるであらう。

抑も音樂も亦人生行路の記録と考へ得べく、旅は生活の壁間に切り開かれた心の窓である。旅するものが自ら動くことによつて世界は繪卷物の如く走馬燈の如く現じ來り、又消え去ることは既に音樂と一脈の相通ずるものがある。汽車の旅に見る車窓寸刻の藪椿の色や徒歩路傍の清流にひたした釜の飯粒も、生の姿の一斷面として眼に心に燒きつくことがある。俳聖が伊良古の岬に鷹一つを見出でて喜び、木曾路の時雨に猿をあはれむ靜かな愛も旅の心である。僧徒の雲水、俳人の行脚ほど密接とはいひ難いが、古來樂人も旅の惠を享けることが多い。歐洲中世の吟遊詩人や我國の虚無僧、東西の巡禮行などを考へるのも面白からうが、私は先づ音樂一般に就て旅に因みあることを擧げて見たい。

元來遙かなるものへの思慕・憧憬は音樂の主調ともいひ得るほどだから、その一つの現れとして旅へのあこがれは古來幾多の詩歌と直接間接に結んで音樂の好題目となつてゐる。解放の喜びとまだ見ぬ國の美しさを偲ぶ心は「鳥になりたや」と歌はしめ、「君よ知るや南の國」となり、旅立ちを送る人送らるゝ人の情緒は「渭城朝雨」の送別歌に吟ぜられ、Bachの初期小品「旅立ち」にも

素朴且ユーモラスに取扱はれてゐる。明治時代大いに流行した鐵道唱歌の起句「汽笛一聲新橋をはや我汽車は離れたり」や、俗謠の「汽車は出て行く煙は殘る」の感傷は、卒直に萬人の胸を打つものがあつた。又ながい旅路の夕に家郷をおもふ「はるばる來つる旅をしぞ思ふ」とか、「あまの原ふりさけみれば」的な感情は、古今東西の歌謠の好材となつてゐる。

○

次に音樂に現れた旅そのものゝ諸相をたづねれば、先づ旅路にきく耳新らしい音樂や物の音は著しく旅情をそゝり、後日旅の思ひ出にも特色を點ずるものとして「風流の初めや奥の田植唄」とよまれ、支那の詩人は塞北の胡歌に腸を斷ち、西洋ではアルプスの牧笛、ヴェニスの舟唄など屢々より大きい樂曲の資材に用ひられる。追分や馬子唄の一くさりで直ちに觀客を旅の情緒に誘ひこむのは、演劇や落語のほゝゑましい常套手段である。田舍馬車の喇叭や牧畜の鈴の音等も同樣の意味で、音樂の中に取り入れられる。特色のある鳥や獸の啼聲、水車の音、更に又必ずしも旅とは限らぬが歩行・騎行・舟行の緩急さまざまなリズムも、樂曲に基本的な氣分を賦與してゐる。

○

然しさうした、多くは藥味的な現象よりも、もつと本質的なのは、それほど明確單的なリズムを示さない大自然や旅中見聞の人生の姿、歴史の種々な斷面が樂人に與へる感銘であらう。昔から大部分の作曲者の生活本據は都市であるから、旅することによつて初めて自然の懷に入り、親しくその聲をきくことができる。Beethovenの愛した郊外散歩も小さい旅行と見得べく、「パストラル」はそれによつて生れたといひ得るだらう。日月星辰も人里遠く離れてこそ、その素顔素肌で太古さながらの全貌を呈して、驚

異の念を起さしめ巨匠の心魂を高め深めるであらう。大海のほとりに永劫を思ひ江流に臨んで逝く者亦かくの如きを嘆ずるが如きクラシックな感情を初めとし、雲霧・雷電・風雪等が大地の諸相諸物と或は戰ひ、或は和する大自然のリズムは、大小の器樂聲樂に永久の足跡を殘して居り、今後も又殘すであらう。

更にそこへ多少の人事がからめば古城・廢趾・墳墓・否平素は何となき街道、人家さへも旅にありてはその原義を示し、やがて山川草木國土一切の靈の默語は、作家のファンタジーを養育するのである。特定の自然がその間に處する民族の生活を通じて民謠に深き刻印を殘す一例として、かつて海洋の國たりしポルトガルの民謠は、今尚どことなく海の哀音を藏してゐると、柳澤健氏の御土産話にきいたことがある。かくの如く考へ來れば、作家の旅は眞摯な勤行の一つであるから獨行を本旨とすべく、幾多の Wanderer の詩曲と「冬の旅」は獨旅の心鏡に映ずる自然と人生の面目である。

○

そこで今少し立入つて、旅の心は如何にして、又如何なる姿を音樂に於いて現はすであらうか。淺く弱い描寫音樂は別とし、よき音樂となるためには旅の印象感銘も深く作家の主觀に融け合はねばならぬ。餘りに偉大なる自然は到底即興的な表現を許さず、物珍らしい風物はスケッチ風な佳品を生むのが精々ではあるまいか。Debussy の數作の如きはその優秀なものであらう。

又一般或は特定の旅のさま／〃／な印象を樂的秩序に從つて組曲やシンフォニーにまとめ、その間前に述べたやうな手段でローカルな雰圍氣を雜へた例は、大小の作家に少しとしない。Mendelssohn の「蘇格蘭土交響曲」R.Strauss の「伊太利より」・「アルプス交響曲」等はその著名なものであり、ピアノ曲では尚更多

く枚擧に遑がない。しかし忌憚なくいへばそれらの多少とも標題樂的な樂曲もその題名をとり去り、單に一音樂として聽いても面白いのでなければ強い存在とはなり得ず、題名を附けることによつて興趣を何程か助けるといふのが常であり、又それを以てしても聲樂は別として、器樂の領域では大家一代の傑作となることは稀であらう。

○

考へて茲に到れば旅と音樂との關係に於いて重んずべきはもつとウルな[iii]自然と人生の感銘であり、それが心裏の深淵を遲かれ速かれ潜りぬけ、MotivやThemaとして浮び上り、音樂獨特の道に副うて開展され鍛へ上げられてこそ、初めて不可思議にしてしかも樂を愛するものには自明的な姿となり、以て萬象生成流轉の相を證現するのであらう。リガの旅の歸途、北海幾夜の風濤の體驗に胚胎せるWagnerの「さまよへる和蘭人」の如きは、その一例とするに足るであらう。そのやうな高い藝境から「森の水車」のやうな素朴卑近な描寫樂までの間に無數の段階があり、古來旅の名を冠する樂曲や、何等かの意味と形で自然の姿を描いた音樂は、その那邊かに位することゝ思ふ。

底本　山岳雜誌『山小屋』　第百十二號　（昭和十六年五月號）

---

i 「蒸汽きや出て行く」とあるが、明らかな誤記のため「汽車は出て行く」とした。
ii 「蘇格蘭土」とあるが、メンデルスゾーンの交響曲「スコットランド」の漢字表記法の一つである「蘇格蘭土」の誤植と判断して訂正した。
iii 著者の自筆稿には横書きで「Ur な」とある。

以上　入力および注記　信時裕子